



## 自称日本一の屋台達

金丸弘美  
食総合プロデューサー

「とんど祭り」は門松や注連飾りなどを焼く行事。灰を持ち帰ったり、焼いた餅を食べると病よけになるといわれる行事で、各地の神社でも行われている。大阪には「高津宮とんど祭り たぶん(自称)日本一の屋台達」という素敵な祭りがある。

高津宮神社の「とんど祭り」は身動きできないほどの満員。出し物が豊富なのだ。境内では落語会が開催される。本殿では雅楽が演奏され、囃子の奉納もある。神社ならではの行事かなと思ってしまう。ところが元・憂歌団の木村充揮さんのライブやフラメンコまでも登場する。

そしてなにより驚くのが屋台の長蛇の列だ。大阪の一流店が出店する。和食店、たこ焼き、炭火焼肉、焼き鳥、手打ちうどん、鍋、フレンチ、イタリアン、スイーツ、スッポン、中華、居酒屋など十六軒。ワイン、焼酎、日本酒も揃っている。ほとんどが五百円。それ以上の値段のものもある。並んでいる人に「なんでこんなに並んでるんですか?」と尋ねたら「なに言うてんのや。大阪の正月の名物やで。うまい店が屋台出しとるのや」とのことであった。

イタリアンにもすごい行列で、購入しようにも一時間もかかりそうだ。並んだ人に、また尋ねる。「ここ美味しいですか?」「何言うとんのや。ここは若手イタリアンで、カリスマの店やで。」

イタリアンの店主に尋ねたら「高津宮の屋台は大阪の店の人気店がでています。仲間に入れてもらうのが夢でした」というから驚きである。

屋台に並ぶ人はかなりの常連さんも多いらしく境内の庭にシートを敷いて家族や仲間たちとあちこちの屋台の料理で食事会や酒盛りをする光景も。手分けして屋台に並び、各屋台の美味しいものを入手して、仲間のところで食事という段取りの人たちもいる。お盆のかわりに菓子箱の蓋を使って各屋台から料理を運んでいる人もいる。

実際に屋台が個性的。料理がバラエティに富んでいる。どれもおいしそう。焼酎の屋台に目をやったら、有名な焼酎がずらりと並んでいる。それだけでもどこにもない屋台だというのがわかる。有名ホテルの屋台もあって、こちらは外国人のシェフがスタッフとともに料理を出している。シェフは達者な日本語で「ドウデスカ。コンナ屋台ハ、ニホンデモナイデシヨ」。料理人が神社で屋台を出す。こんなにシンプルでわかりやすい、だがだれもが思いつかないアイデアにあつと驚いたのだった。

開催は「とんど祭り」の一日だけ。評判の店が屋台を出すと口コミで広がり話題の祭りとなった。宮司の小谷真功さんは「正式に数えたことはないけれど三万人は超えています」とのこと。集まった人に宮司さんの笑顔が絶えない。

神社の法被(はちび)をまとった氏子さんたちが陰で支えているのがわかる。絶えず掃除をして、ゴミ入れのゴミをまめにとり省き境内を清潔に保っている。そんな裏方さんたちの活動があることも神社の舞台を楽しいものになっている。

もうひとつ人気を集めているのが、江戸時代の富くじを復活した「高津の富」だ。神社を舞台にした「高津の富」という落語が実際にある。もともと「富くじ」は神社の修理の資金を集めるために江戸時代に始まったものだという。

そこで、昔のように箱の中の木の札を突いて、札を読み上げる形を再現したのである。

羽織袴の子供がキリで箱の中の木札について、それをやはり羽織袴の落語家の人を読み上げる。読み札は干支と番号があり、それと一致した札を



フレンチの屋台(右)、富くじ(左上)、イタリアンの料理(左下)

持っているあたりとなる。

富くじは境内の売り場で一枚二百円で購入する。シール式になっていて、木札に貼って箱に入れる。その箱が神社の本殿に運ばれ、午前と午後の二回の富くじの札突きとなるのである。控えの番号と一致すれば景品がもらえる。

景品は米一俵や自転車やチョコレート五キロの塊など、ユニークなものばかり。みんな富くじの様子をかたずをのんで見守っている。当たった人は飛び上がって喜んでいる。正月だからほんとはめでたい。札売りは女性陣の氏子さん。この人たちの笑顔がまたとてもよかった。富くじの売り上げが祭りの運営資金と神社の奉納となる。

小谷さんによると開催は二〇〇二年から。それ以前は「とんど祭り」には、二千人もくればよかったというから、今では信じられない。「一般の祭りの屋台と違いおいしい店が出ている。気軽な楽しみとなって神社を知ってもらう機会になりました」。

高津宮(高津神社)は、千日前通と谷町筋の交差点の近くにある。仁徳天皇を主神として八六六年に始まったという。一五八三年に現在地に移り、昭和二十二年に戦火にあい焼失。昭和三十六年に氏子の力で復興した。ところが、最近では周囲にマンションが建ったり、氏子も高齢化するなど、参拝者も激減してきていたという。

そこで相談をうけたのが居酒屋の「ながほり」の中村重男さん。中村さんたちが支援している落語の会「黒門寄席」を、神社に譲ってもらえないかという相談からだ。そうして神社での高座が開かれるようになった。落語だけでなく食の文化も発信しようと、中村さんが仲間呼びかけて始めたのが「とんど祭り」での屋台である。「大阪と関西を元気にしたい」という思いからだ。言うが、なんと素敵な祭りとなったことだろう。